

正論原稿：近代化再考

第3の局面迎えた日本の近代化

欧州文化と本格融合の可能性も

公文 俊平

この数年、梅棹忠夫（文明の生態史観）、速水融（日本の勤勉革命）、川勝平太（文明の海洋史観）、渡辺京二（日本近世の起源）、笠谷和比古（武士道と日本型能力主義）などの議論に触発されながら、近代化過程の意味の再解釈を試みてきた。その結果、次のような見方が可能ではないかと思うようになった。後半の部分はほとんど夢でない妄想にすぎないかもしれないが、とりあえず読者のご高覧に供したい。

広義の近代化は、中華帝国やローマ帝国の周辺部にあった日本と西欧で並行的に生じた文明の進化過程であって、遅くとも1000年前から始まっている。西欧の「封建化」とは、広義の近代化の初期局面のことである。

日本の近代化は、「武士社会化」あるいは「イエ社会化」と言いなおすことも可能で、三つの主要局面からなる。

10-12世紀に始まった第一局面では、大和政権と東北政権のはざまにあった東国で、弓馬の民（狩猟民）と開発領主（農耕民）のハイブリッド性をもった集団が自立してみずからの所領をもち、さらには連合国家（鎌倉国家）の形成に成功した。武士集団の発生である。

15-16世紀に始まった第二局面では、中部地方から畿内にかけての農民たちが武士化し、「下克上」によって地域的主権国家（戦国大名の領国）を作り上げた。その複合体が徳川国家となった。その過程で、農民／武士の新兵器として活躍した鉄砲は、連合国家の成立後は武器としては廃棄された。農民／武士集団の下層部分は、刀・鉄砲狩りによって再び農民身分に落とされたが、半自治的な組織（村や町）の運営が認められた。上層部分は行政官に転身した。日本近代文明の華とでもいうべき江戸文明は、「勤勉革命」と「日本型能力主義革命」という二つの重要な社会変化を基盤として、平和で豊かで清潔な社会を、200年以上にわたって形成・維持した。

この第二局面において、日本は西欧近代文明と二度邂逅した。16世紀の最初の邂逅では、唯一神（ゴッド）や鉄砲のような文明要素が急速に受容されたが、やがて棄却された。19世紀の第二の邂逅では、軍国化や産業化のような文明要素が急速に受容されたが、これまたやがて棄却されることになりそうだ。

そして今日、つまり20-21世紀にかけて、日本の近代化はその第三局面に入ろうとしている。この局面を主導するのは、西国（沖縄、九州）に台頭しつつある新しいタイプの市民というか、私の用語で言えば智民（ネティズン）たちになりそうである。彼らはアジアとの再邂逅・交流を触媒としつつ、地域ネットワークによる地域の主体化を行う中で、さらに全国的な「智民革命」をも推進していくのではないか。韓国では、すでに「ネティズン」という言葉が広く普及しているのも、はなはだ示唆的である。

このような見方からすれば、16世紀以降の西欧に生じた「近代化」は、日本の第二局面での近代化と直接対応する狭義の近代化過程だったと解釈しなおすことができよう。この意味での近代化は、国家化と産業化の局面をへて、情報化の局面に移行しつつある。

もちろん、情報化に向う流れは、日本でもほぼ同時並行的に起こっている。そう考えれば、情報化局面は狭義の（西欧的）近代化の第三局面にあたるというよりは、日本と西欧を通じた、いや世界全体に通ずる、広義の近代化の第三局面であり、最終局面にあたるという解釈ができそうだ。この局面で起こる近代文明の広汎な伝播は、これまでの近代化後発国が試みたような強引なトップダウンの開発主義的方式ではなく、より柔軟な共発／創発主義型とでもいうべき新しい方式によって進められるのではないか。

同時に、少なくとも文明のレベルに関するかぎり、これまで並行的に進んできた日欧の近代化の流れは、ここでいよいよ互いに融合しあうだろう。いや、ことによると、今度こそ文化のレベル、つまり基本的な価値観や世界観のレベルでも、本格的な交流と融合が起こるかもしれない。そうなれば、それこそ近代そのものを超える「ポストモダン」の文明の姿がそこに浮かび上がってくることになりそうだが、それにはまだまだかなりの長期間がかかると思われる。